<研究ノート>上月文書にみられる「足利尊氏 発給」文書について

中野, 栄夫 / NAKANO, Hideo

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

44

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2001-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011395>

〈研究ノート〉

上月文書にみられる「足利尊氏発給」文書について

中野 栄夫

—

本稿でとりあげるのは、徳島県立文書館が架蔵している「上月文書」である。⁽¹⁾上月文書は播磨国佐用郡上月の地（現兵庫県佐用郡上月町）を本貫の地とする赤松氏の同族たる上月氏に関する文書で、約一三〇点ほどの中世文書群である。⁽²⁾このように上月氏は播磨の守護赤松氏に属する有力な武士団であり、本文書は注目すべき重要史料と判断されるのであるが、史料の存在は知られてはいたものの、従来ほとんど文書群として分析されることはなかった。かつてはわずかにその一部が『姫路市史料編』に活字化されていたに過ぎず、全体が活字化されたのは最近刊行の『兵庫県史料編中世九』（以下、単に『兵庫県史』という）が最初である。⁽³⁾つまり今もって本文書は手つかずといつてよい状態なので、ここではまず本文書の基礎的研究から始めたい。本文書に関する研究は皆無なので、そのことだけでも大いに意義があると考えられる。

ちなみに本文書の重要性を認識したのは播磨国田原荘・蔭山荘（兵庫県神崎郡福崎町）を研究した時であり、その後文書の写真を借用して研究を進め、上月町にも調査に出向いた。数年前この文書が徳島県立文書館に寄託されていることを知り、上月町からの紹介で徳島県立文書館に伺い、上月文書を調査したのが最初である。その際には十分な研究が出来ていなかったが、四年ほど前から大学院の卒業生や院生とで本格的に上月文書の研究を始め、その後は年に三回程度同文書館に伺い、同文書館側と調査の進め方を打ち合わせるとともに、主として本文の確定作業を進めてきた。現在もそういった確認作業を進めているが、さらにその作業を進める必要を感じている。また文書撮影も一応行い、最近も再度の写真撮影を行ったが、撮影が万全とはいえないので再々度の撮影を試みなくてはならないようである。

本文書の研究で問題とされる点を挙げてみるなら、まず最初になすべきは、まず読み本の確定である。『兵庫県史』の翻刻は、よく読みとっていると高く評価はできるが、完全であるとは言

切れない。その第一は案文とみなすべきものを正文とみなしていること、第二に発給者の比定の混乱、第三に発給年代の比定の不十分さ、第四に文書の誤読などである。第一の点についていえば、特に細川勝元の文書については正文と断定できるものは一点のみで、他の文書については案文の可能性がある。また第二点については、足利義詮とすべき発給者を足利尊氏としている例などがある。また第三点については、特に赤松政則発給の文書の年代確定が不可欠である。そういった点が問題点として挙げられるが、本稿ではそのうち、第二点を取り上げたいと思う。

二

上月文書には一枚物と巻物とがあるが、その中に次に紹介する文書を含めて三六点の文書が、重書案としてまとまっている一巻がある。これは、赤松晴政（永祿八年（一五六五）正月没）の代に、一巻に写し取られ、赤松晴政の披見を仰いだものであり、巻頭（袖）に赤松晴政の袖判（証判）が据えてあり、巻末には「右証文、被成 御見知之状如件」との奥書があり、紙継ぎ目ごとに、赤松氏奉行人の難波泰興が裏花押を据えているものである。なお、包紙ウハ書きは「赤松晴政公并細川勝元公之御書御直判証文巻」と記されている⁵⁾。

つまり、上月氏が重要な受給文書（重書）を写し取って赤松晴政の証判を受けたものである。その中に、以下に示す五通の文書が含まれているのである。以下では、改行は原文書にしたがい、それ以外は『兵庫県史』の翻刻にしたがいつつ、文書名もそのま

上月文書にみられる「足利尊氏発給」文書について（中野）

ま示すこととする。ただし文書番号は徳島県立文書館の用いている文書番号を示し、便宜『兵庫県史』の文書番号を「県史〇号」と添え示した。

〇九一 足利尊氏軍勢催促状写（県史一号）

〔追筆〕
尊氏將軍御代
宮方合体御連変之間、

依無勢打越江州畢、仍

近日可責上京都也、早馳參

可抽忠節之状、如件、

観応三年閏二月廿九日

〔追筆〕
尊氏
御判

上月源七殿

〇九二 足利尊氏感状写（県史二号）

於八幡合戦致忠節之由、赤松

帥律師則祐所注申也、尤

以神妙、弥可抽戦功之状、如件、

観応三年六月十三日

〔追筆〕
尊氏
御判

上月新兵衛尉殿

〇九三 足利尊氏感状写（県史三号）

美作国英多城合戦之時致

忠節之由、赤松筑前守貞範

所注申也、尤以神妙、弥可
抽戦功之状、如件、

文和貳年二月十三日

〔追筆〕
〔同尊氏〕
御判

上月源七殿

○九四 足利尊氏感状写（泉史四号）

今度最前馳上京都致

忠節之由、貞範所注申也、

殊以神妙、弥可抽戦功之

状、如件、

文和二年七月卅日

〔追筆〕
〔同尊氏〕
御判

上月左近衛将監殿

○九五 足利尊氏軍勢催促状写（泉史五号）

美作国鞍懸城事、且

令警固、且可致忠節之

状、如件、

文和四年正月十七日

〔追筆〕
〔同尊氏〕
御判

上月左近衛将監殿

三

ここで、これらの文書の解読の助けとするため、白明のことに
属すが、これらの文書が発給されたこの前後の政治情勢を一瞥し
ておこう。

〔1期〕 観応三年（一三五二）ころ

これ以前から、足利尊氏と弟直義は対立し、一時和平していた
が、観応二年（一三五二）七月一九日、両者の間に再度亀裂が入
り、直義は政務を辞した。直義の与党の石橋頼房・桃井直常等が
各自の国に帰ると、七月二六日、近江の佐々木高氏（道誉）を討
つとの名目で尊氏は近江に発向し、播磨の赤松則祐を討つとの名
目で義詮は播磨へ赴いた。それ以前に両氏は南朝と通じて幕府に
反旗を翻していたのである。しかしこの出陣は表向きの名目で、
尊氏父子が直義を挾撃する計画であったことを悟った直義は、そ
の一党を率いて急遽北国に向かった。直義一党の出京を知ると尊
氏父子は入京し、直義および南朝との和平交渉を並行して行っ
た。八月一日、直義が斯波高経の越前金ガ崎城に入ると、そこに
集結する武士は日毎に増し、その威勢は京都を圧し、尊氏方から
の和議申し入れをも聞かなかつた。しかし、九月に入つての近江
での尊氏方と直義党との両軍の交戦に直義軍が敗れると情勢が変
わり、一時和議が成立したが、桃井の強硬な反対により、それも
ならなかつた。直義党の武将で尊氏方に走る者もあり、直義は敦
賀を発つて北陸を通過して関東に入り、一月一五日、直義は信賴
する上杉憲顕のいる鎌倉に入った。

一方南朝に対しては、八月七日に後醍醐の寵愛を恣にした法勝寺の円観を使者としたが、これは失敗した。その後も交渉を重ねた結果、一月二日に、ようやく南朝の使者が入京した。南朝の論旨二通は、和議の提案を認めるといふ意味の赦免の論旨と、直義の追討を命ずる論旨とであった。翌三日、尊氏は論旨拝受の請文を使者に渡すと、翌四日、京都守備を義詮に任せて東下し、途中直義軍を破りながら翌年正月五日鎌倉に入り、直義を下した。

しかし、南軍の動きは活発であった。和議以前から、奥州では宇津峰宮、九州では後醍醐の皇子懐良親王をいたたく南軍が行動を開始していたが、和議後の正平七年（一三五二）二月三日には、近々天皇（後村上）が帰京する旨を義詮に伝えた。南軍の主要目的は京都と鎌倉の同時占領であった。直義落命の二月二十六日、後村上の本宮は賀名生から河内東条に進み、ついで住吉神社に移り、閏二月一九日には天王寺を経て八幡に進出した。兵力に自信がない義詮が和平に期待をかけていた時のことである。そして閏二月二〇日、義詮はわずか一日の戦闘で大敗して近江へ逃れ、京都に残された持明院統光厳・光明・崇光の三上皇と廃太子直仁は翌日、後村上の本宮八幡に移され、その後、楠木の根拠地河内東条へと送られた。近江へ逃れた義詮は、正平の年号を廃して、観応三年（一三五二）の日付で、「宮方合体御違変」（南朝方と義詮は美濃土岐・近江佐々木等を率いて反撃を開始し、四国から細川清氏が上洛した。前年に南朝に帰順していた播磨赤松も南朝から離れた。三月一日、南軍は八幡に退いた。義詮は一ヵ月

足らずで京都奪還に成功し、その後は東寺に陣して八幡攻めを続けた。五月一日、幕府軍の総攻撃を受け、後村上以下の南軍は賀名生に逃げ帰った。六月に入ると、河内東条にいた三上皇は賀名生へと移されたので、帰京策は絶望的となった。そこで八月一日、義詮は弥仁王を踐祚させて後光厳天皇とし、年号を文和とあらためた。

また、南軍は、京都攻撃とほとんど同時に鎌倉を攻めた。閏二月一日に上野に挙兵した新田義貞の子義宗・義興の軍は鎌倉に迫り、信濃にいた宗良親王が征夷大將軍に補任され、諏訪氏等を率いて上野に入り、奥州北畠顯信も下野に進出してきた。一七日に、尊氏は鎌倉を捨てて武蔵狩野川に走り、それと入れ換えに翌日、新田軍が鎌倉を占領している。その後しばらく武蔵各地で両軍の激しい戦闘が続いたが、二八日には南軍は鎌倉を放棄し、その日尊氏が宗良親王・新田義宗等を武蔵小手指原・入間河原・高麗河原に破っている。京都奪還の三日前の三月二日に尊氏は鎌倉に戻った。

〔二期〕文和二年（一三五三）～文和四年（一三五五）ころ

西国各地では文和元年（一三五二）九月ころから南軍の反撃が始まっていた。直義の養子となっていた足利直冬は一月になると東上をはじめ、いったんは安芸まで進み、長門に陣していたが、南党の吉良満貞・石塔頼房等を頼って南朝への帰順を願い入れ許されていた。

摂津では南党楠木正儀・吉良満貞・石塔頼房等が北軍の赤松光範と戦っていた。一月、摂津で光範が劣勢となると、義詮は

佐々木秀綱・高秀等の援軍を差し向けたが、これも翌文和二年（一三五三）正月には京都に退くありきまでであった。三月には、さらに土岐頼康を摂津に派遣したものの、翌月には仁木義長とともに京都に追われた。この頃備前・石見などで山名氏以下の南党が挙兵している。

同二月には権大納言北畠顕能が大和に入り、同じく権中納言四条隆俊が紀伊に入った。四月には桃井直常・直信等が越中で北党の吉良氏頼と戦っている。こうして兵を挙げた南軍諸勢は徐々に京都へと迫ってきた。六月、足利直冬は長門から周防へと兵を進めた。同月六日、摂津で活躍した吉良・石塔等の軍は八幡に入り、そのため、後光厳天皇は延暦寺へと還御、ついで義詮も天皇の後を追ったが、叡山がこの政争に巻き込まれることを拒んだため、義詮は後光厳を奉じて一三日に美濃小島に逃れた。京都はふたたび南軍の手に落ちたが、美濃における義詮軍の立て直しや、鎌倉公方足利基氏が大軍を率いての上洛の風説、また後光厳による尊氏上洛催促などがあったためか、七月の中旬から下旬にかけて山名時氏は但馬へ、楠木正儀は河内へ、と次々京都を離れていった。その他、吉良満貞・石塔頼房も京都を去った。代わって北党の石橋和義・赤松則祐等が入京、二六日には義詮も入京して、京都を追われて以来廃されていた文和の年号を復した。尊氏も七月二九日には鎌倉を発して、九月三日に美濃垂井に至って後光厳に謁し、美濃に迎えに赴いた義詮とともに、後光厳に供奉して二一日に入京した。

この文和二年（一三五三）九月の、尊氏帰洛以後、しばらくは

平静を保っていたが、翌文和三年（一三五四）五月ごろからふたたび南軍の動きが活発となる。五月から八月にかけて、東上をめざして直冬が石見で活動をはじめ、九月には、南朝宗良親王が千種顕経・新田義宗等を率いて越後で戦った。一〇月には中国の南軍が但馬に至ると、義詮は自ら軍を率いて同一八日に播磨弘山に布陣した。南軍が京都に迫ると聞く、一二月二四日、尊氏は後光厳を奉じて近江へと逃れた。京都はがら空き状態になるが、これは南軍を京都に誘い込み、東西から挟撃しようという作戦と見られている。

はたして、明けて文和四年（一三五五）正月一六日、南軍の桃井直常・直信、斯波氏頼等が入京し、二二日には直冬・山名時氏・石塔頼房等が入京した。尊氏は東坂本・比叡山と陣を移し、二月三日には西坂本に布陣した。対する南軍は、桃井直常が如意嶽、直冬が東寺、山名時氏が西山という構えを見せた。この間、播磨弘山にいた義詮は、そこを発して二四日に摂津河原に到着、二月六日には摂津神岡に南軍を破り、山崎に兵を進めた。その後、南北両軍の合戦はなかなか決着を見なかったが、尊氏は清水坂・比叡・東寺へと、義詮は西山法華山寺・法性寺と陣を移しながら戦い、ついに三月二日に、南軍を八幡へと退けた。南軍は一八日にはその八幡も引き上げ、天王寺へと移った。一九日、義詮はさらに南軍を討とうとして宇治に向かうが、すでに南軍は撤していたため、兵を収めた。二二日には尊氏・義詮ともに自邸に戻り、二八日には、後光厳も土御門殿に還御した。六月には京都の南軍は、離散・帰国したとの風聞が流れた。

四

さて、自明のことで紙数を費やしてしまったが、以上のことを踏まえて、先に示した文書を見直すこととしよう。まず九一号文書であるが、文中に「宮方合体御違変」とみえ、これはまさに右に見たI期で、諸国武士に動員令を発した文書そのものにあろう。また九二号文書は、その日付けから見ても、五月の八幡攻めにおける勲功を賞したものと見て間違いない。

ところで、『兵庫県史』では、発給者を「足利尊氏」とするが、先に見たこの時期の政治情勢から知れるように、この時期、尊氏は鎌倉にいた。遠く離れていても文書の発給は可能であるが、この時期に八幡攻めにあたっていたのは、義詮であることに留意する必要がある。つまり、このような文書を発給する主体は義詮であろうと見るのが、ごく常識的な解釈であろう。

以上の推測は、この時期に発給された文書を一部でも垣間みることによって、たちどころに判明する。そのよい例を九一・九二文書に即して一つずつ挙げてみよう。

A 足利義詮御判御教書 ○史料纂集『朽木文書』三三三号

宮方合体御違変之間、所罷越江州也、不日馳参、可抽軍忠之状、如件、

観応三年壬三月廿三日 (足利義詮)
(花押)

佐々木出羽守殿

B 足利義詮感状 ○大日本古文書『吉川家文書』一一二九号

於八幡致忠之由、赤松帥律師則祐所注申也、尤以神妙、弥可

上月文書にみられる「足利尊氏発給」文書について(中野)

抽戦功之状、如件、

(足利義詮)
観応三年六月九日 (花押)

吉川五良入道殿

これらの文書の花押は、Aは「内閣文庫影印叢刊 朽木家古文書」上に、またB『大日本古文書』に影印が見られ、それによりそれぞれ尊氏ではなく、義詮のものと知ることができる。このことにより、九一・九二号文書は尊氏発給ではなく、義詮発給文書であることが知られるのである。

ここで問題となるのは、『兵庫県史』が「追筆」としている両文書の書き込みである。まず九一号の「尊氏將軍御代」に関しては、尊氏が鎌倉に下っていたにせよ、義詮はあくまでも名代と考えることができるので、さして問題はあるまい。問題となるのは両文書の御判に添えられた「尊氏」という書き込みである。時代からいって、その時期の將軍は尊氏であるので、尊氏に比定してしまったものと考えられるが、上月家では、この文書は尊氏発給のものであると、思い込んでいたとも考えられよう。いずれにしても、『兵庫県史』はこの書き込みに引きずられてしまったものと推測される。

さて、つぎに、九三号く九五号を考えよう。尊氏が鎌倉を發つて京都に向かうのは、文和二年(一三五三)七月二十九日のことであるので、九三・九四号の発給された時には、尊氏はまだ鎌倉にいたか、鎌倉を發つたばかりの時期である。このころ発給された中国地方の文書の一つだけ挙げておこう。

C 足利直義軍勢催促状 ○本間文書

美作国凶徒退治事、

早令発向、可致忠節之状、

如件、

文和二年八月廿四日
(足利義詮
 (花押))

渡谷小四郎入道殿

このころは、南軍の動きが中国地方で活発であり、美作国ではしばらく戦鬪が重ねられていた。しかし、この時期の文書の発給者は義詮である。ちなみに文和二年(一三五三)六月一日に、美作国青柳狂地頭職を園城寺に寄進しているが、発給者は義詮である。⁽⁸⁾以上より、九三・九四号も同様に、義詮発給と見るべきであろう。

つぎに、九五号であるが、この時期は、京都へ南軍が入っており、それを尊氏が討とうとしていた。義詮は播磨弘山にあり、そこを発つのは正月二四日のことである。尊氏も文書発給は可能であるが、尊氏は南軍との戦鬪にあたり、西国での戦局指揮は義詮が担っていたようであり、写なのであまりよい例とはいえないかも知れないが、中国筋の武将に対して、義詮はつぎのような文書を発給している。

D 足利義詮御感御教書写 ○大日本古文書『小早川家文書』

二、小早川家証文三〇四号⁽⁹⁾

去年最前馳参播州、去二月六日、於神無山抽戦功、迄于上洛、令御手之条、殊以神妙、弥可致忠節之状、如件、

文和四年卯月廿三日

(花押) 義詮也

小早河出雲四郎左衛門尉殿

すなわち、九五号も義詮発給と見なしてよいであろう。

五

以上、述べてきたことをまとめれば、九一〜九五号文書の発給者は足利尊氏ではなく、足利義詮であるということである。したがって文書名をそれに即して正すべきである。単純な事実確認に過ぎないかも知れないが、文書に書き込まれた文字にだまされるということは、じつはしばしば見られるようである。かくいう私も、かつて担当した『岡山原史 編年史料』で、先に掲げた九三・九五号文書の発給者を足利尊氏としてしまったという苦い経験がある。⁽¹⁰⁾

先にも指摘したように、上月文書は全く手つかず状態であるので、こういった基礎的作業も必要と思われ、小稿を記した次第である。

註

- (1) 本文書中には徳島県指定有形文化財となっている「南方御退治条々」(五二号)がある。これは、嘉吉三年(一四四三)の禁鬪の変によって旧南朝方に奪われた神璽を、長祿二年(一四五八)に赤松遺臣が奪還した時の経緯を上月満吉等が記したものであり、『群書類従』合戦部に「上月記」として収録されているものの原本とされるものである。本文書中には神璽奪還に向かう前に上月満吉が息女五々に宛てた譲状も残っている。また本文書中には年欠文

書が多いことは前述したが、それらはほとんどが応仁文明の乱に際して発せられたものであり、その年代確定は応仁文明の乱の研究にも資することができる。

- (2) 上月氏が播磨国上月の地(上月町)を本貫とすることは、その名字からも推測することができるが、史料的にも上月聖義(吉景)讓状(一号)に「さよの西の庄ミやうじのちのうち、時安のとうけ名」、あるいは上月満吉所々知行分目録案(五四号)に「佐用内、名字之地峠名」などに見られることから判明する。ただし上月氏は西播磨を本貫地とする武士団であるが、早くから上月の地を離れて、摂津国荒牧の地(宝塚市)を本拠としていたらしい。しかし赤松氏との軍事的同盟関係は保っていたようであり、文書中には、応仁文明の乱に際しての赤松氏からの軍勢催促状などが多い。

- (3) 本文書については次のような成果がある。まず古くから東京大学史料編纂所所蔵影写本を利用した東郷松郎氏の手書き読み本のコピーが研究者の間に広まっており、それが唯一の成果であり拠り所であった。なお、『兵庫県史』の按文を見ると担当者はかなり研究を進めたものと見られ、得るところは多い。

さて本文書が重要史料と思われるのに、従来ほとんど研究されてこなかった理由としては次のような事情が考えられる。それはこの文書が徳島県内に伝来し、かつそれが個人蔵であったということである。そのため、まず第一に、

上月文書にみられる「足利尊氏発給」文書について(中野)

兵庫県内の研究者からは、それが徳島県内に伝存し、しかも最近まで個人蔵であったということから、原文書を参照しての研究に困難が伴われた、ということである。また逆に第二の理由として、それが播磨にかかわる史料であるため、徳島の中世史研究者の研究対象としにくいこと、である。またそれに加えて、本文書には年欠の文書が多く、文書の年代確定が難しいということである。そのようなことから、今もって本文書は手つかずといつてよい状態である。

- (4) その他、つぎのことも問題となろう。それは、文書番号としては徳島県立文書館が使用しているものがすでにあるが、『兵庫県史』では、文書を編年し、年代順に文書番号を独自に振り直していることである。したがって『兵庫県史』の文書番号では原文書を検索することはできない。それも文書の年代比定が確たるものであるならば、それはそれとして許容されるであろうが、必ずしも万全とはいえないので、その点からも問題である。

- (5) 『兵庫県史』第一七号按文参照。
(6) のちの文書に、たとえば「御先祖御拜領之御内書并御書(八一号)」などと書かれているが、そのことより、そのように推測することができるのではなからうか。

問題は、この書き込み(「追筆」)が、いつ行われたかである。いずれの書き込み、筆運・墨色ともに本文とは異なるので、本文とは別の手によって記されたものであり、いわ

ゆる「追筆」とみなせ、のちに追記されたものであるとみるのが妥当であろうが、現段階では、本文と追記との時間差については、確たる断案を提出できないので、その点は、結論を留保しておく。ただし、九一・九二号の「尊氏」の書き込みと、九三号以下の「同尊氏」の書き込みとは異筆とみられ、後者は、少し時代が下るものと推測される。その点を含めて、今後の検討の課題としたい。

(7) 『岡山県史 編年史料』一四八一号、『南北朝遺文 中国・四国編』二五〇九号。本文書は東京大学史料編纂所蔵影写本で確認し、改行はそれにしたがった。

(8) 『岡山県史 編年史料』一四七九号。

(9) 文書名は『大日本古文书』のままとした。

(10) 『岡山県史 編年史料』一四七六号・一四九二号。この時期に出され文書で、「足利尊氏発給」とされている案内(写)には、同様のものがあるのではあるまいか。

(付記) 本稿は、大学院ゼミでの院生の報告の成果を多く取り入れている。なかでも当該時期の関係史料の検索に関しての和氣俊行君のレジュメ、当該時期の政治情勢に関しての高杉真一君のレポートからは多大の教示を得た。その点からいえば、本稿は共同研究の成果ともいえる。その労にむくいるため、当該期の政治情勢については、煩をいとわず詳述した。

その他、本研究では多くの方のお世話になっている。上月町現地調査では上月町公民館および井上恒雄氏のお世話になっ

ている。また徳島県立図書館、なかでも立石恵嗣氏には多大の便宜を図っていただいている。さらに本研究を進める上で最初きっかけとなる文書写真を貸与していただいたのは福家清司氏である。この場を借りて諸氏にお礼を申し上げたい。

なお、本稿は、法政大学特別研究助成金による成果の一部である。